中学生連載企画

私たちのふるさと松山学 No.25

津田中学校

まごころが繋（つな）ぐ心温かいまち 味生

私たちの校区にある味生小学校、味生第二小学校には、それぞれ、「真」と「情」の文字が刻まれた石碑があります。二つの文字を合わせ「真情」と書いて、私たちは「まごころ」と読みます。この「真情（まごころ）」は、私たちが大切にしているものの一つです。

「まごころ」が繋ぐ橋

味生地域の南斎院町と北斎院町の間を流れる宮前川に「真情橋」という橋が架かっています。この橋には、心温まる物語が語り継がれています。

大正12年（1923年）7月、台風による大雨で宮前川が増水し、南斎院と北斎院をつなぐ石造の一本橋が半壊してしまいました。しかし修理されず、南斎院の児童たちは、毎日の通学に不便を感じながら、上級生が下級生を助けてこの危険な橋を渡り続けていたそうです。それから半年後、地域に住んでいた一色忠徳ら6人の少年は、この橋を修理することを決意します。「早起き会の奉仕作業」として、午前4時に起きて橋に集合し、スコップ、ジョウレンを駆使し半壊した橋を少しずつ補強し約一週間後、橋の修繕を終えました。そのことを知った味生村青年団は、寄付を募り、本格的な橋の修理を行いました。そして、橋を「真情橋」と名付けたそうです。

現在、当時と同じ場所には、道幅の広い橋に改修された「真情橋」があり、人々の生活に欠かせない橋となっています。

少年たちが修理した当時の真情橋

現在の真情橋

新田長次郎と真情橋

東洋の皮革王として活躍した新田長次郎は、安政4年（1857年）、温泉郡山西村（現在の山西町）の農家に生まれました。新田帯革製造所を発展させ、乳製品やベニア板の製造にまで事業を広げました。地域や国の発展には、人材の育成が重要と考えていた長次郎は、郷土の人材育成にも力を注ぎ、松山高等商業学校（現・松山大学）の創立にも貢献したそうです。

真情橋が大雨で半壊した大正12年（1923年）の夏、味生小学校の旧校舎の工事が始まりました。長次郎は、当時大卒の初任給が50円の時代に、1万5000円を寄付し、地域の教育のために、献身的な支援を行いました。6人の少年が真情橋の修理を決意したのも、人のために尽くすことの大切さを、長次郎の行動から学び取ったのではないかと考えられています。

長次郎や少年たちの活躍から、約百年が経った今、地域に残る「まごころ」は、橋だけではありません。私たちの学校には、「まごころタイム」という話し合いの時間があります。授業や集会で、グループに分かれて意見を出し合う時間です。「まごころ」を持って話し合いに参加するこの時間は、お互いの意見をよく聞き、認め合い、深め合うことを大切にしています。長次郎や少年たちの思いに触れると、この「まごころタイム」も特別な時間に感じます。

また、津田中学校には「まごころ教室」もあります。「まごころ教室」では、先生が学習相談にのってくれたり、勉強の質問を聞いてくれたりします。先生からの「まごころ」を感じることができる場所の一つです。

「まごころ」を受け継ぐ

今、津田中学校では、私たちの心に受け継がれてきた「まごころ」を、自分たちの手で広げていきたいと考え、生徒が主体となって「人権」について考えることに力を入れています。

昨年、12月に行った人権集会では、「いじめを許さない学校づくり」をテーマに意見交換を行い、「まごころタイム」では、全校生徒がいじめ問題について本音で語り合いました。「まごころ」を大切にして「いじめ」に向き合うと、自然と温かい意見が出てきて、たくさんの人と思いを共有することができました。

人権集会の様子

また、「思いは伝えることが大切」をテーマにした、「ありがとうウィーク」も実施しました。一人一人がカードに感謝の気持ちを書き、それを校内に掲示することで、お互いの優しさが伝わる一週間になりました。

感謝の気持ちを書いたカードを掲示

100年の思い「真情（まごころ）」を大切に

「人のために尽くす」という先人たちの思いを受け継ぎ、津田中学校から「まごころ」を発信していきたいです。

前列左から、渡辺菜々子さん（2年）、松友優奈さん（3年）、織田郁弥さん（3年）、一色颯真さん（3年）。後列左から、若林花さん（3年）、石﨑悠芽さん（2年）、松平紗英さん（2年）、宮﨑凛門さん（3年）、一色悠大さん（2年）。

先人と文化の読み物教材 「語り継ぎたいふるさと松山 百話 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

第Ⅰ巻に新田長次郎を収録

松山の先人や文化に関する心に響くエピソードをまとめた教材集です。一話が10～14ページ程度で、気軽に松山ゆかりの先人の足跡や文化に親しむことができ、市立図書館で見ることができます。